

氏 名	西 田 正 規
	にし た まさ き
学 位 の 種 類	理 学 博 士
学 位 記 番 号	論 理 博 第 700 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 55 年 9 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	縄文時代の食料資源と生業活動 —鳥浜貝塚の自然遺物を中心として—

論文調査委員 (主 査) 教授 池田次郎 教授 川那部浩哉 教授 日高敏隆

論 文 内 容 の 要 旨

縄文時代の生業に関する研究は、縄文文化の経済的基盤を理解する上で、また縄文人の身体特徴の地域的、時代的変異を解釈する上でとくに重要である。申請論文は、縄文時代の生業を個々の生業活動が有機的に結合したものとして捉えるという、従来の研究には欠如していた視点から縄文時代の食料資源と生業活動を分析し、その特性を明らかにしたものである。

資料は、福井県鳥浜貝塚の縄文時代前期の堆積層から採集した柱状ブロックサンプルの土壌を水洗選別し得られた 1 mm 以上の自然遺物が中心である。同定された動植物遺体は約90種、そのうち可食動植物は75種以上に達し、そのなかには、ヒョウタン、リュクトウなどの栽培植物が含まれるが、量的に多く、食生活の基盤になりえたと思われるメジャーフードは、クルミ、ヒシ、クリなどのナッツ類、淡水産小型魚類、淡水産貝類と、哺乳動物では、イノシシ、シカであることがまず指摘されている。次いで、狩猟、漁撈、貝およびナッツ類の採集など、各種生業活動の季節性、活動場所、獲得方法、収穫物の種類と性質、収穫量、獲得効率などを詳細に分析した結果、鳥浜人の生業活動を安定食料、優良食料、保存食料の獲得活動に類型化し、三型の生業活動の有機的結合と季節的配分によって、彼らの食生活が年間を通じて安定していたことを明らかにしている。とくに安定食料獲得活動の中心である網漁は、中緯度森林地帯の定住狩猟採集民に広く共通するものであること、また縄文時代の定住集落の出現は網漁の開始と密接に関係するという考古学的事実とから、縄文時代の生業活動のなかで網漁の占める役割が重視されている。

次に申請者は、鳥浜における縄文前期の生業を西日本の縄文後期低湿地遺跡のそれと比較し、縄文後期になって栽培植物の比重が増大し、野生植物の利用技術が向上するなど若干の変化がみられるが、いずれも網漁、シカ、イノシシの弓矢猟、大量のナッツ類利用という点で共通し、生業活動の季節的配分など重要な点には大きな違いは認められないことを指摘している。さらに、西日本縄文時代人と近世アイヌの生業をそれぞれナッツ型、サケ・シカ型と呼び、縄文時代の東日本には両者の中間型であるサケ・ナッツ型が存在し、三地域の生業型はそれぞれの地域の自然環境に対応していることを明らかにしている。最後にこれらはいずれも内水面での網漁を重要な生業活動とした集団に適用できる特性であるが、網漁より栽培

植物の比重が高く、縄文農耕の存在が問題にされている縄文中期の中部山岳地帯では、その生業は植物資源の利用に関し他地域よりはるかに高度の技術を伴うものであったろうと推論している。

以上の分析を通じ、申請者は、生業形態に多少の時代的变化、地域の変異はあるにしても、生業活動の季節性、食料獲得方法、メジャーフードの特性、個々の生業活動の関連など、生業の基本的性格は縄文前期以降後期まで、ほぼ日本全土を通じて変ることはなかったという結論に達している。

論文審査の結果の要旨

日本の先史時代遺跡から出土する自然遺物の報告例は数多く、それらの量的分析から縄文時代の生業を考察した論文もこれまでにいくつか発表されている。しかし、その多くは狩猟、漁撈、採集など各種生業活動を個別に扱い、それらの技術的側面を明らかにするにとどまっている。先史時代人の生業は、個々の生業活動の単なる集合としてではなく、それらが有機的に結合した総体として把握されるべきものである。申請論文は、このような観点から縄文時代の生業の解明に本格的に取りくんだ最初の論文である。

申請者は、福井県鳥浜貝塚の縄文前期の堆積層から採集した動植物遺体の同定、量的分析を通じ、気候、地形、植生などの古環境ならびに当時の居住形式を復元し、各種生業活動の内容と収穫物の性質を詳細に記載しているが、そのうち、縄文前期すでにヒョウタン、リュクトウなど栽培植物が管理されていたという指摘は、日本における農耕起源の問題に重要な示唆を与えるものとしてとくに注目される。また、可食動植物約75種のうち、量的に多く、食生活の基盤であったと考えられるメジャーフードを抽出し、それらの残存量から算出した可食部重量、カロリーを指標として各メジャーフードの重要度を判定しているが、この独創的な方法がその後の分析を進める上で重要な役割を果たしている。

次に、個々の生業活動の属性を検討し、鳥浜人の生業活動を、春から夏にかけ主として湖で行われる安定食料獲得行動、秋の集約労働により冬期に備える保存食料獲得活動、冬期、シカ、イノシシを主たる対象とする優良食料獲得活動に整理し、鳥浜人の食生活の安定性は、これら三種の生業活動の有機的結合によって支えられ、各種生業活動のなかで、安定食料獲得活動の中心である内水面での網漁がとくに重要であったと推論しているが、この指摘は、狩猟活動を重視してきた従来の考古学の常識を打破し、縄文文化の理解に新しい視点を与えたものとして高く評価することができる。

縄文時代前期鳥浜人の生業の特性を画きだすことに成功した申請者は、次に、それを西日本の縄文後期の遺跡、および近世アイヌをはじめとする世界各地の狩猟採集民の生業と比較し、縄文時代生業の時代的变化と地域の変異を明らかにしている。その結果、栽培植物の比重が増大し、ナッツ類の利用技術が向上するなど若干の時代的变化と、それぞれの自然環境に応じて冬期保存食料の種類、あるいは獲得活動の季節性などに地域差がみられはするが、生業活動の基本的性格は、縄文前期以降、弥生式時代の開始まで、北海道から西日本にかけての地域では、鳥浜人のそれと大差なかったろうと推定している。この仮説は、縄文時代の生業活動の基本型を始めて提示したものであり、縄文文化の経済的基盤を理解する上できわめて重要な意味をもっている。

以上、申請者は、鳥浜貝塚出土の自然遺物の分析を通じて、縄文時代の生業の基本型を抽出し、その時代的、地域の変異を明らかにすることに成功しており、その成果は縄文時代の人類学的、考古学的研究に

大きく貢献するものと考えられる。

よって本論文は、理学博士の学位論文として価値あるものと認められる。